研究構想図

学校教育目標

人間尊重の精神を基調として、心身ともに健康で、学ぶ意欲をもち、創造的な思考力・判断力・表現力や豊かな情操を備え、国際社会において信頼され、すすんで貢献する人間性あふれる児童を育てる。
そのために「知ることから生きることへ」を教育理念として、次の目指す児童像を設定する。
〇やさしく　〇かしこく　◎たくましく

体育科の目標

◎豊かなスポーツライフ
〇生涯にわたって運動に親しむ資質や能力、（知識及び技能、学びに向かう力・人間性等、思考力・判断力・表現力等）
〇健康の保持・増進、体力の向上

研究主題

みんなで楽しい、みんなが楽しい体育学習

「子どもが自ら追究したくなる学習」への転換

研究の手だて

視点１：「『何ができるようになるか』に働きかける手立て」

（体育科の学びを通じて「何ができるようになるのか」という観点から、育成すべき資質・能力を整理する。その上で、整理された資質・能力を育成するために「何を学ぶのか」という、必要な指導内容等を検討し、その内容を「どのように学ぶのか」という子どもの具体的な学びの姿を考えながら単元を系統的に構想していく必要がある。
→「子どもが運動に親しむために必要な内容であるか」、「子どもたちの具体的な学びの姿を考えながら構成しているか」を吟味する。

手だて２：「『どのように学ぶか』に働きかける手立て」

（「何について」、「どの場面で」、「どのような方法で解決するのか」課題解決学習を設定する。）
→子どもが、「何を学んでいるか」「どうすればよいか」が分かりやすい授業づくりを進める。

手だて３：「教師が直接的に働きかける手立て」

（児童が「やってみたい」「できそうだ」「できた」「やればできる」「あの力を身に付けたい」と学習意欲を高め、課題解決学習を促す言葉掛けや評価等の準備をする。）
→言葉掛け、発問、共有タイムの在り方、補助、与える知識や資料などを検討する。

「体育の学習の学び方についての系統性・子供の学習を支える教師の働きかけ」

各学年のめざす子どもの姿

低学年「できた！うれしい！と夢中で活躍する児童」
中学年「認め合い、学び合いながら、運動する楽しさを実感する児童」
高学年「互いに高め合いながら、目標に向かって全力で運動に取り組む児童」
くすのき学級・きはだ学級「自分の目標に向かって、楽しみながら運動に取り組む児童」

≪松沢小学校の子どもの実態≫
・体育の授業に対して楽しいと思う児童が高学年に上がるにしたがって減ってきている。
・体育の授業は楽しいと思う児童は第４～６学年になると７０％を下回る。特に、５～10%の児童は体育の授業を楽しいと思っていない。
・体育の授業で上手く体を動かして運動ができるようになっていると思う児童は、中学年で一度落ち込み、第５・６学年でやや回復している。
・学級の 15～19%は体育の授業で上手く体を動かして運動ができるようになっていると思っていない。
・どんな自分の目標でも、失敗を恐れないで挑戦している児童は、第１学年は約 44%、第６学年は約 25%であり、学年が上がるにつれて挑戦意欲が低下する傾向にある。

研究仮説

単元を通して「何ができるようになるか」を明確化し、「どのように学ぶか」課題解決学習を促す学習環境の設定や教師の直接的な働きかけが継続的に行うことができれば、児童は、主体的に学習を調整しながら自分自身や他者、モノと関わり合い、学習の成果として達成感を得ることができる。

研究の検討・検証（運動有能感調査）